

## 正宗敦夫自筆稿本『吉備歌人伝資料』(下)

著者	見尾 久美恵
雑誌名	清心語文
号	6
ページ	96-110
発行年	2004-08
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1560/00000291/">http://id.nii.ac.jp/1560/00000291/</a>

## 資料紹介 正宗敦夫自筆稿本『吉備歌人伝資料』(下)

見 尾 久美恵

ノートルダム清心女子大学国語国文学科発行『古典研究』第十九号

(一九九二年五月)・第二十一号(一九九四年四月)・第二十三号(一九九六年

五月)に続き、正宗敦夫自筆稿本『吉備歌人伝資料』第一巻の紹介を行

う。今回紹介するのは「吉備歌人伝資料拔萃」と題されて一綴じとな

っている部分で、第一巻に合巻してある。これは第一巻の八〇丁から

一〇〇丁までに相当する。ここで取り上げられた歌人は藤井高尚、萩

原広道、高橋正澄、木下幸文、菅沼斐雄、僧澄月、小寺清先、小寺清

之、関藤政方、小野務、森寺美郷、藤井高雅、業合大枝、正宗雅敦の

十四名である。一〇〇丁目には「明治卅一年一月廿二日夜校華」とし

て井上通泰の署名押印があり、通泰が朱の書き入れをしている。『古典

研究』第十九号で赤羽淑氏が紹介した部分、及び第二十一号で見尾が

紹介した部分の各歌人の増補訂正編とも言え、吉備歌人についての敦

夫の資料収集と調査が整理され総合されていく過程が窺える。なお、

通泰の朱の書き入れについては(通泰筆)として記した。

一〇一丁から一二三丁は藤井高尚の著書と岩月白華についての通泰の文章を抜き書きした部分で、今回続けて紹介を行った。この一二三

丁をもって第一巻が終わる。

吉備歌人伝資料拔萃

吉備歌人伝資料

藤井高尚 正五位下長門守(通泰筆)

大和田建樹

藤井高尚 松の屋と号す。備中の国吉備津宮の祠官也。宣長の門に入

り国学を修め、殊に源氏物語風の文を作り一派を為せり。天保十二

年七十七歳にて没す。余八九、此書ヲミテ、同 著書には伊勢物語語新釈、消息文例、佐喜草、

松の落葉、日本紀御局考あり。文稿を松の屋文集と云ふ。(和文学史

日本人名辞書

藤井高尚は天保十二年八月十七日卒、年七十七。通泰筆 三寸靈神と諡す。(名

の訓「タカヒサ」とあれども、出雲路日記の祝詞に高尚とあればかく

訓べし。)

藤井高尚の著書

○出雲路日記 文政十一年己卯夏上梓

一冊

此は文政十一年二月二十一日大田宗喬、三木正情の二人をしたがへて、出雲杵築宮にまゐりたる道の記也。高尚の和歌和文を見るによし。ことに和文は松の屋文集などにて見るを得れども、和歌は此書及吉備国歌集の外、二三の類題集のみなり。

○消息文例 寛政十一年正月編成  
文化十一年正月上梓

二冊

此は門人真野守貞のもとによりて物語文などより消息文の例を数々引出て、其詞に注釈を加へてみやびをの文か、んしるべとせる書也。

○さき草 享和三年二月八日編成  
文化三年四月三日上梓

一冊

さき草は歌のはし書の事をつばらにかきしるせる文也。さき草としもなづけたるは「ものにしるしおく歌のことば書」「たかき人に見せまゐらす歌のことばがき」「さきの人におくる歌のことば書」と、ことば書のかき様を三種に分けてしるされたれば也。さき草は三つにかゝる枕詞なり。此書を元として萩原広道は「葉山の葉」をあらはす。

○伊勢物語新釈 文化九年九月より編をおこし十年正月編成  
文政五年戊寅九月彫成

六冊

此は伊勢物語の注釈書也。此書こそ藤井高尚氏の学力を知るにたる文にして、本居宣長の古事記伝、萩原広道の源氏物語の評釈におけるが如し。此の物語詞華言葉の雅なりしかば、世にもてはやされたる事いと甚だしく註釈の書三十種にあまれり。其の内三大註釈とて世にもてはやさるゝは、円珠庵契沖の勢語臆断、加茂真淵伊勢物語古意と此の書也。此の三つの中にてまさりたる所おとりたる所はあれど、此の新

釈なむいとまさりてぞおほゆる。此の書は藤井氏を見るにいとよければ他に評論する所あらむ。

○三のしるべ 道のしるべ文政七年甲申正月八日より編をおこし同月の廿一日終ル  
文政九年終ル  
文政十二年己丑三月上梓

三冊

此ふみは、道のしるべ、歌のしるべ、文のしるべとして其の道につきさとせり。

○松の屋文集 文政十一年春上梓

二冊

此の書は文集なり。

○松の落葉 文政十二年春上梓  
外四冊  
外目錄一冊

五冊

此の書は隨筆也。

○日本紀御局考 文化八年十一月十五日上梓

一冊

紫式部を日本紀の御局といひし意をくはし<sup>(マ)</sup>のべて、源氏物語の見やうをしるせる書也。未だ見ず。

○大祓後々釈 一通泰筆

二冊

此は大祓の詞の注釈にして、本居宣長の大祓詞後釈につける意にての名なり。未だ見ず。

○浅瀬のしるべ 一通泰筆

一冊

俗ニ云フ。タゞ一言ヲオモシロク文ニツゞレルナリ。(通泰筆)

○おくれし雁 文化四年十二月三日編成  
文化八年壬午四月上梓

一冊

消息文例ノ追加ナリ。(通泰筆)

○古今和歌集新釈 高尚夫人遺稿  
高麗先生補遺

十五冊

此の書の事、歌のしるべなどに見へたれど、完全せずして没せるにか、上梓になりしを聞かず。吉備国歌集に此の広告あり。尚万葉集の新釈

も著述中の由、歌のしるべに見ゆれど未だ見ず。

## 萩原広道

萩原広道 備前岡山の藩士藤原某の次男也。通称小平太浜雄と云ふ。葭沼、出石居、鹿鳴草舎、蒜園の諸号あり。次男なるを以て分家して藩に仕ふ。甚だ才氣に富めるを以て侯大にこれを用ゐる所有らんとす。然るに広道は分家せし上に年少なるを以て、同輩大にこれを妬み、広道の性活発なるを利用し、相謀りてかれに遊女楼に遊びむことをす、めかつ道（通稱）びきたり。其時不幸にして媒毒を得、手術功なく面貌怪醜に到りければ親属の名譽をけがさんをおそれ、三十才前後（天保の末か弘化の初めか）浪人して浪華に住し、姓を萩原と改め名を鹿藏と称す。後鹿左衛門と改む。学派は本居派に属すべきも、や、ことなりて発明せる所多し。弓尔乎波係辞弁に、本居翁のてにをはを三條に分ちて「はも徒」「そのや何」「こそ」と挙げたるを論じて、「はも徒」をばすべて「徒」とし、「そのや何」をば「そやか」とし、のと何とを除きたるよしをわきまへたり。これ等本居の説と異なる点也。（此は其の例々）著書に先師本居の翁など書けるは、本居翁は国語界にいさをし多ければ云へる也。元より本居翁に付きて学びし事なし。野々口隆正に名簿を送りしことあり。そは語格の事を問はん為なりとぞ。又源氏物語評釈出版の時、故障ありて前田夏蔭門人の称を冒せしと雖ども、固より二氏の門下に立つべき物にあらず。（されは謝罪する所なり）漢学の力も饒也。浪華にて高麗橋にも筑前橋にも所々にすめりき。（筑前橋の家は篠崎小竹いたく広道の才学を愛

し、且その貧しきを憐み、自資を抛ちて始めてこゝに門戸を張らしめしとぞ。此説磯野秋渚）。嘗て糊口の料に曲亭翁が物したる開卷驚奇侯客伝は、第四輯出版の後故ありて稿を続がず、其のま、翁物故したりければ、第五輯は萩原広道が蒜園主人と号して稿を続ぎぬ。此も又病の爲めにはたさゞりき。文久三年癸亥十二月三日、年四十九にて浪華白子町に没す。墓は摂津西成郡浦江村妙寿寺の杜若池の傍にあり。碑の高さ台石とも凡四尺許りにして、面に萩原広道之墓と記し、裏に文化十二年乙亥二月十九日生文久三年癸亥十二月三日卒とあり。

## 著書

### ○源氏物語評釈

十四卷

此は広道の全力を用ゐし所総論にて其の文章を評せり。未だ他に見ざる註釈の一体を創意せり。（此の書はもと篠崎竹陰、緒方洪庵、中玉樹の輩の春日寛平の家に会し葭沼の講説をき、し筆記也。病の為に花の宴にて講筵絶えたり。されば本書も亦花の宴までにて完本にあらず。）

### ○本学提綱

四卷

此は先皇の大道を論じたる書也。

### ○心の種

二卷

此は詠歌に付き種々の心得を記せる書にして「かなづかひ」「てにをは」「名所」等より短冊の書き方までしるせり。

### ○同拾遺

二卷

此は前にもれたるを集つめたり。共に初学の者の宝にこそ。

○小夜時雨

此は本居宣長の玉叢の続篇と云ひてまし。

○遺文集覽

契沖春満以下近人の文章をあつむ文苑玉露の続篇とも見るべき書也。

○万葉集略解補遺

此は橘の千蔭の万葉集略解の補遺也。

○玉匣ツシヤ補註

此は本居宣長が玉匣の補註也。

○百首異見摘評

此は香川景樹が百首異見（百人一首の註釈）の摘評也。

○住吉物語松風抄

此は住吉物語の註釈也。

○古言訳解

嘉永元年冬十一月稿成  
同四年辛亥六月十一日梓成

此は鈴木氏の雅言訳解の続篇にせんとてものせしにて、記紀万葉の言辭を俗語に訳せしもの、甚だ便利なる書也。

○詞書葉山の栞

此は藤井高尚のさき草を紹述して詞書の様をさとせり。

○弓尔乎波係辞弁

此は本居翁の詞玉緒、弓尔乎波紐鏡の図などの上より係りゆく「てにをは」を三條に分ちて、「はも徒」「ぞのや何」「こそ」と別ちしを論じたる書也。前にも言へり。

○葦の葉わけ

一卷

二卷

五卷

五卷

一卷

二卷

一卷

一卷

一卷

一冊

此は六樹園「都の手ぶり」と同じ様にて、彼は江戸の種々の事を記し、こは浪華の種々の事を記せり。浪華繁昌記とも云ふべき書なり。

○玉篠草紙

隨筆初集

○弓尔乎波略図義解

○西戎音譯字論

一冊

二冊

二冊

などありとぞ。家集もありとぞ。広道の和歌は類題千船集は彼の撰すべかりしに、病の爲めはたさずして伊勢の人佐々木弘綱の撰したる故に、いとさはに記載しあり。それにて見は大かた歌風もうかゞひ得べし。広道は才氣拔群、文章巧なれども和歌は得ず。

（附記）この伝記は藤原氏、井上通泰氏のものせられし広道の伝記及古学小伝並に磯野秋渚のものせられし伝等によりてしるす也。

高橋正澄

マサキミ  
△笠岡には高橋五入ありて人庄屋を兼ね 正澄はこれ也（通泰筆）

高橋正澄は備中国笠岡の人にして通称△右衛門と云ふ（正澄とも書く）。笠岡の大庄屋なり。実父は備中国上房郡平松正春にして、茶を好み京都室町頭金龍水の辺に居をトし舍号を正龍水舎と云ふ。正澄は其の舎にて産る。天明八年大火に家やけければ、父と共に国に帰り、高橋美啓の養子となる。妻備後の国三次町の者なり（名不明）。正澄は初鳴祐爲の門人となり後加藤千蔭の門に入る（いづれも若き時）、後景樹の門に入る。笠岡の大庄屋なりしが、下役生長泰興と不和を生じたりければ、役を捨て、大阪に文政五年十月十一日国を出発し同月二十四日大阪に着す。其頃既に幸文死後なりければ、幸文の門人等、医師

西山陽と云ふ人を頼み、正澄に師たらん事を乞ふ。故を以て京に上

る所ありしも、はたさずして大阪に留り文政十二年十月十八日剃髪し僧となり名を残夢と改めけり。役を捨て心すがくしく也きとて清園と号す。嘉永四年二月二十七日歳八十四才にて大阪に死す。法名を清正澄泉齋居士とす。墓は大阪天満寺町専念寺に在り。正澄の子は高橋熊彦正純と云ふ。著書は「塵室草露」三卷、こは備中に在りける時の歌を集めたる也。「清園詞草」三卷、こは浪速に出でたるよりこのかた天保十四年までの歌を集めたり。「心月詞花帖」二卷。

清園後章四卷、残の夢三卷（以上家集）、記紀物名考六卷、記紀縫結抄二、記紀詞林十九、万葉緯六、万葉言霊創解八、三代枕辞例三、国語本義十五、類聚活言六、古言考三、タモノドリ七、歌仙家集新正卅二、神詠製歌考六、言霊神名考六、皇統称名考一、名義考十九、和歌六体考（通泰筆）

万葉物名考（弘化三年十一月成）三冊、万葉国字抄（嘉永元年四月成）二冊、万葉詞林抄五、石上枕辞例五、国字定源、

以て深く万葉を研究し古字に精通せるをしるべし。桂園十哲の一人にして同国の人木下幸文、菅沼斐雄よりも学力におきては第一の位を占むといふ。

其の和歌、

遊糸 すぢもなき名にも有かなちる花をぬきもとめぬ春の糸ゆふ  
森熊夫の花みに行てみるに盛なり

風なしと心ゆるすな桜花さかりぞ散のはじめなりける

秋夕雲 月影のいづる山にはあらねども心にかゝる夕ぐれの雲  
晦日の夕ぐれに

まどの戸にさすや夕日の影見ればわづかに年ぞ暮のこりける

これにて歌の姿大かたにしらるべし。己れ嘗て井上通泰先生をとひまつりて幸文斐雄正澄の三氏の和歌の評をき、し事はべりき。其時先生の申さるゝには、正澄の歌は卑俗なり、幸文の歌は平凡也、斐雄の歌華美なり云々と。いとよきつひでなれば書つけはべるなり。

（尚此人の和歌につきては香川景樹翁のかゝれたる詠草の奥書もあり。此をも引出て少しく和歌を評し見まほしけれど、歌風歌論などはよく其の人の著書並に伝記を明らかにしりての後にあらざれば、かりそめの筆のすざびにあげつらふべき物にもはべらず。されば今は其の伝記を井上通泰先生の談並にしがらみ草紙十三号君山居士の桂園叢話によりてしるしつ。）

流川集太郎

#### 木下幸文

サナフミ

木下幸文は備中浅口郡長尾村の人也。通称は民蔵、義質、木下八郎右衛門義綿の子也。幸文初朝三亭と号し、後亮々舎又無庵と号す。初め和歌を僧澄月に付て学び、澄月死後（澄月寛政十年五月死す。）慈延に学び後香川景樹の門に入る。十哲の一人にして和歌和文に妙なりき。  
文化三年月（通泰筆）  
幸文又歌の傍詩と画とをよくし、画は鉏路雲泉の弟子にて、さる方の号を風濤漁者といふ。又禪を誠拙和尚に学ぶ。幸文いかなる故ありてか景樹にそむきし事はべりき。又さる所やありけむ、文化元年十月十日岡崎にうつり、同年三月十一日市官の漆書を獲て改めて入門し、文化四年六月二十三日岡崎を出て樵木町にうつり、再び景樹に背きた

（其後出る所ありて用を論し）

門に復せしに晩年も<sup>同</sup>あり。そは景樹が開戒法師に贈りし書にて明らかなり。(随所師説ある法師の詠草に桂園叢書第三集にあり。見るべし。)(桂園叢書第二集第三集に幸文の景樹にそむきたる事に付きてはいとつばらにしろしあり。これにて見るべし。)<sup>通</sup>其れより<sup>奉</sup>園に<sup>贈</sup>帰<sup>贈</sup>り—文政元年大阪に上りて、年四十三文政四年辛巳十一月二日没す。嗣なし。墓は長尾村御堂山にあり。碑は頼山陽の撰書にて「無庵居士之墓」とあり。幸文の妻は前後二人有り。供に京人也。著書は「さや／＼草紙」三卷(文政四年板刊)「さや／＼遺稿」三卷(編者は浅野讓、版行年月不明)。門人中勝れし物は浅野讓、田中長足也。<sup>等</sup>(此は井上通泰大人の談並に桂園叢書を参考して記しつ。)

#### 菅沼斐雄<sup>あを</sup>

菅沼斐雄は備中国小田郡吉浜の人北村賢親の子也。<sup>新庄屋(通泰)</sup>幼名<sup>幼名</sup>希慈と云ひ<sup>き</sup>雄、通称は好面、後北村綾雄を改めて菅沼斐雄頼母となす。字子英、蘆渚又桔梗園と号す。景樹に<sup>初め小希淑の門人となり後(同)</sup>したがつて和歌を学び、文政元年二月都に上り、其二十日に都を立ち二十三日池鯉鮒にて景樹の一行に追ひしき、江戸に下り(道の記袖くらべあり)。景樹帰郷後も江戸にとゞまり<sup>今古(同)</sup>申由<sup>金十其(同)</sup>合なる<sup>合</sup>栗松軒兒山紀成の許にて夕論館を開き景樹の門人を教へけり。夕論館と名づけたるは万葉三なる弁基の、<sup>論(同)</sup>

亦打山。暮越行而。廬前乃。角太河原<sup>角太河原(同)</sup>。独可毛<sup>め</sup>将宿<sup>ホム</sup>。

によれる也とぞ。年四十九才にて天保五年八月二十五日江戸にて没す。墓は下谷龍泉町西徳寺に在り。法諡妙徳院<sup>普(同)</sup>。信士とあり。家集あ

れども板に上らず、冊数同じからず種々ある由。

#### 吉野山の歌

花にぬる蝴蝶のゆめやいかならむおぼろ月夜のみよしの、山

#### 日の岡にて

おもしろき春の日の岡こえかねてやすらふ袖に花ぞちりける

著書袖くらべあり。こは其師香川景樹に従ひて江戸に下りし道の日記

也。明治二十二年十月しがらみ草紙古曲遺声の部に入れられ、井上通泰大人の校正を経てあらはれぬ。尚桂園叢書第一集にもおさめられぬ。

(井上通泰氏の談並に桂園叢書二集によりてしるす。)

#### 僧澄月

澄月は備中玉島の人也。号を垂雲軒又は醉夢庵といふ。(二に福山の人にて玉島に來り小僧となりしと云説あり。)幼時玉島の綿屋と云へる商家に仕へたりき。主家の用にて、屢同じ国倉敷なる錢屋と云へる商家へ往きしに、其家の媼、いつもいと傲りがにもの云ひるを、<sup>(云々)</sup>其心に恨みて、いかで立身して此媼に見せばや、さて立身せんには此道ならでとは思ひ定めて、俄に出家したるが後に叡山に登りて望みし如く僧正<sup>名僧</sup>となりぬ。(石坂堅壯翁物語なりとて田原樸水氏のしがらみ草紙に上されしによる。)(洛東上岡崎村に垂雲軒と云庵を造りて居る。武者小路実岳卿の門人にて二条流の歌詠也。小沢蘆庵、伴蒿蹊、僧慈延と共に當時和歌の四天王と称せられき。門人もいと多かりき。その中桃沢夢宅、木下幸文なんいとすぐれたりき。寛政十年五月二日年八十五才にて没



す。其和歌、

咲しより花にわすれしうき世をも今はたみせて落桜かな

大井川かはらぬぬせきくちもせでいつまで老の波はこゆらん

をしむべきたからもちりの世すて人きづなはなれしの猫やこれ

わかぬ浦のあととむかしにかよへども及ばぬ波にちどり鳴也

ながめきてわれとかこつもうき秋の月のこたへん身のむかしかは

### 小寺清先

清先姓は源、小寺は其氏、常陸介と称し栖園と号す。備中小田郡笠岡の人、家世其邑稻荷祠に奉ず。清先生れて頤悟、八歳能く大字を作る。未だ弱冠ならずして京に行き、業を卜部に受く。既にして学成り、且親老たるを以て郷里に帰る。清先父母に事て色養誠を致す。其死するに及んで喪に居る事各札に過ぐ。寛政己未病を以て祠職を長子清之に伝へ、廬を山下に結び焉れに居る。適ま県令早川氏来て郷校を興し、敬業館と名け、清先を挙て講師と為す。題勉四子六経を講ず。初め邑人専ら商販を業とす。是に於て漸く学に向ふ者多し。文政十年丁亥病に罹り閏六月二十六日端坐して逝く。年八十。館後の山下に葬る。遺命して葬儀を薄ふし、一つに本邦の古札に遵ひ浮屠を用ひず。長子清之、次子廉之並に能く父の業を継ぎ令名あり。初清先本邦神聖の教委靡振はざるを慨き、身を以てこれに任ぜんと欲し、大に国史に講究し諸家の説を折衷し、發揮する所尠ならず。因て本教闡幽を著はす。其他著述する所三器図説、国号論の如きは謙肯て梓行せず。皆家に蔵

すと云ふ。清先人となり平坦温雅、奇僻の行ひをなさず。燕居独処他の嗜好なし。唯好んで国雅を作る。初僧澄月に学ぶ。澄月以て歌道托する所ありとなせり。詠積んで数千首に至る。題して栖園集と曰ふ。世に行はる。

### 小寺清之

清之は清先の長子監物と称し棟園と号す。父の業を継ぎ家声を墜さず。亦好んで国風を詠ず。備中備後の間、国史に歌道に教を乞ふ者尠ならず。晩年頗る著述に耽り、備中名勝考、老牛余喘各三卷あり。梓行して世に公にせり。其他老牛余喘二篇、備後略記等若干卷は草稿已に成るも上梓に至らずして世に終れりと云ふ。天保十四年癸卯十一月十日病を以て卒す。年七十四歳。

### 関藤政方

政方は備中吉浜村神官某の子にして備後福山藩儒官石川藤蔭の兄なり。壮年移て同国笠岡村に住し医を業とす。立介と称し葭汀と号す。晩年鳧衣なるものを製して居常これを服す。因て又鳧翁と号す。学和漢を兼ね最国風を善くす。練丹之余暇著述して備字例二卷あり、世に行はる。万延二年（文久元年）辛酉正月二十二日卒す。年七十六。同村古城山下群松樹畔に葬る。盖遺命に依るなり。辞世の歌あり、曰く、わが魂のゆくへはいづくしら雲のか、らむ山の松の下かげ



小野務

小野務、字は伯本と称する者ありき。通称を本太郎と云ひ、泉蔵の姪に当る。家頗る富みて、蔵書頗る多く、詩文を好み、又た和歌を景樹及び僧義門に学び名什あり。当時の歌学社会に重せらる。招月亭詩鈔を校正せしは此人なり（望湖道士）。

招月亭、即泉蔵ナリ（通泰筆）

千船集姓名録に、

備中長尾 小野本太郎

義門に学びしは語学なるべく歌にはあらざるべし。歌は始幸文の弟子なり。ソノ証ハ近藤芳樹ノ寄居歌談四ニアリ。後ニハ諸平ニモ学ビシカ。（通泰筆）

正宗雅広談

小野務、甚だ詠歌にたくみなり。内詠史にことにすぐれて妙なり。又浄瑠璃を好み此を題にして歌を詠みき。浄瑠璃百首と云ふものありとぞ。余も或時師正宗直胤大人に従ひて訪問せし事あり云々。

森寺美郷

正宗直保談

森寺美郷（よしさと）、本姓は柳田、通称は一郎といふ。元播州赤穂の人なり。年少岡山に來りて森寺氏をつぐ。歌をよくし又書に長ず。一時盛名ありき。

藤井高雅（タカツネ）

類題千船集姓名録

高雅 備中吉備津 大藤下総守

類題吉備国歌集の自序に、

かくいふはおなじ道のなかの一宮神主下総守大中臣藤井宿祢高枝

藤井を大藤と改めしは高雅なりと吉備津の人藤井一郎語りき。晩年隠居して幽叟と号す。文久三年七月廿五日の夜、京師室町通二条下ル播磨屋源兵工家にて、浪士に斬殺さる。時に年四十七。（通泰筆）

とあり。尚同集の序の終に、

高枝は高雅がはじめの名也。

尚同集の松山山田球撰の後序二枚の所に、

后松屋高枝君云々弘化五年春正月松山山田球

とあり。尚前の序の終に、

嘉永三年といふとの神無月ばかりこれかれおもひおこしてかの埋木の言の葉また世に匂ひ出て云々。

とあり。これにて案ずれば、高枝は高雅の初名にて改めしは弘化五年（即ち嘉永元年）より嘉永三年の間也と知る。舎の号を后松の屋と云ふは高尚のあとつぎたれば也。

業合大枝

類題青藍集姓名録に、

大枝 備前邑久郡上寺 業合石仲

著書 百首異見弁（文政十一年刊）

新刊、通泰筆

# 正宗雅敦の伝

正宗雅敦（マサアツ）、通称は経藏、字は子俊、号亀嶺。万寿（以上俳句に用）、楊樹園。髪兒丸。唐樹園南陀羅（以上狂歌に用）。南陀羅は難田浦の略語にてかたへの人の呼付たる狂号なり。備前国和気郡伊里村大字穂波難田浦の人なり。父は伊助、雅明と号、母は同郡香登村兒嶋某女なり。雅敦は其の長男なり。初より風流を好み、十五歳の時より狂歌に心ざし、独り窓のもとに書を読む事二とせ、十七歳の秋始て浪花梅の家空丸の門に入り、楊樹園髪兒丸といふ。二十二歳の夏、故有て梅の家を出、江戸六樹園飯盛の門に入り学ぶ事四とせ、廿六歳の春判者の列に加り唐樹園南陀羅といふ。四十一歳の時、天保元年元寅閏三月二十三日（一に二十四日）、師翁うせてより一家をなす。又和歌は播州三木元春及び同国山の里なる長治祐義に学び、後獨り国学和歌を研究し、晩年佳調に進む。又俳句併に画をよくす。俳句は大阪八千房に学ぶ。画は五峯を食客として学ぶ。画人の訪問する物たへず。天保九年五月二十六日死す。才四十九歳なり。妻は鹿の子、讃岐多田津岡田森右エ門の長女なり。才八十七才明治十三年死す。こも和歌をよくす。供に柳青院に葬る。雅敦の辞世の歌は諸平氏の筆にて、たどり行心のやみのくらきをも

## てらすは法のともしびの影

と墓にきざめり。妻の辞世は、

思ひのこす事はなけれどなきあとも尚むつまじく年をかさねよ

# 著書

雪月花百首狂歌集 一冊  
朝顔百首狂歌集 一冊  
狂歌略画三十六歌仙 一冊  
新撰七夕狂歌集 一冊  
春興龜廼尾山 三冊  
以上刊行の分  
出雲日記、東国日記、西国日記、伊勢日記あれども刊行せざりしかば、今は原稿も散りうせて見んよしなし。家集あり。

唐樹園狂歌詠草 三冊

雅敦和歌詠草 一卷

亀嶺発句詠草 一卷

は今も余これを蔵せり。画像あり。菅原諸平大人の記あり。左に記さん。

正宗雅敦は備前国和気郡難田浦にすみて家業の暇には戯歌よみて唐樹園南陀羅とも亀嶺ともよび、六樹園叟のめでたる歌人にして手かき書よむかたは更にもいはず、絵道にも分入もの、ふの芸にも心をとめ、あるは月花にうかれて笙の笛を吹、窓の雪に木芽煮て友をまち、又国々の名ある所々見ありきなどして心をなぐさめき。しかあるのみにあらず貧しき里人にたなつものなどを贈りて賑し、が其国のつかさにさへ聞へて酒など賜ひし事もありしを、天保九年五月十日余より病にふして遂に廿六日齡五十にてみまか

りぬ。うみの子なりしかば妹の子雅広をもて家つぎと定めつ。かくて其翌年七月二十七日、彼まづしきを賑し、功をめで給ひて更に晒布一疋を雅広にかづけさせ給ひ、なき跡まで彼々ある人になん。此ぞ在し世の像とて、いろど直胤なくく談り出るに、けにはらからのなげきさこそとおもひやるかし。今は此像をこそ朝夕にかけてしのびはべるべければ、たゞ一言をだにとこはる、をかくまねびとりて何事もいたり浅からざりし事どもをたゞ契つ、

名にかけし亀のよはひは万代に栄をのこすしるしなりけむ  
天保十四年四月十八日 菅原諸平記

以上明治卅一年一月廿二日夜校華

岡山東田町にて

井上通泰(印)

藤井高尚並に其著書(上) 井上通泰

高尚ハ備中国賀陽郡吉備津宮ノ宮司ナリ。

名ハ松屋文集ニタカナホト訓ゼリ。○大祓詞後々釈ノ初ニ吉備津宮宮司長門守從五位下藤井宿祢高尚トアリ。

号ヲ松ノ屋ト云フ。又松齊ト書ケリ。

松ノ落葉一ノ巻ニ、

オノガスミカラ松ノ屋ト云フハ、古歌ニ「千年ヲマツノ深キ色カナ」トヨミタリシ中山ノ麓ニテ松多カル所ナルニ、庭ニモ五モト六本年フリテ、イト大ナルガアレバ、ヤドノ名ニモオフセタルニナン。中山トハ所謂吉備ノ中山ナリ。

初国学ヲ同国笠岡ノ人小寺清先ニ受ケ、後本居宣長ヲ師トス。

松屋文後集上ノ卷神部職任考ノ奥書ニ、

小寺清之ヲデハ、オノレマダイトワカクテソノ父君ノ許ニ物学ストテ行キ通ヒツルヲリノシル人。

清之ノ父ハ清先ナリ。○宣長ノ弟子ナル事ハ証ヲ引クマデモナシ。寛政十一年五月八日從五位下ニ叙セラレ長門守ニ任ゼラル。(神ノ御蔭ノ日記)

天保六年吉田家ヨリ三寸鏡<sup>マスウミタマ</sup>靈神ト云フ名ヲ賜ハル。三寸鏡靈神ノ初度ノ祭ニ大穴持命ノ御前ニ申ス詞ニ、(此文 集ニハ見エズ。サルハ集ノ版ニ上リシヨリ後ノ作ナレバナリ。)

コレノ年頃オフケナクモオノガ和魂<sup>ミギトマ</sup>ヲ三寸鏡<sup>マスウミタマ</sup>ニトリツケテ祭りナムト思ヒヨリテ、其事ヲ都ノ吉田ノ殿ニ申シ、カバ三寸鏡靈神ト云フ名ヲ賜ヒヌ。生ケル人ノ魂ニカ、ル名ヲ賜フ事ハタヤスクアルベキ事ナラネド、高尚幼キヨリ八九ノ老ニ至ルマデタユミ怠ル事ナク、御国ノ学ニ心ヲ碎キ力ヲ尽シテ古書ヲ読ミ考ヘツ、釈キ明ラメテ、諸人ヲモ教ヘイザナフニヨリテ、天ノ下ニ名ヲ知ラエヌル巧ヲ愛デタマヒホメタマヒテ賜ヘルニモアリケル。

天保十一年八月十五日卒ス。享年七十七。墓ハ賀陽郡板倉字向山ニア

り。

碑ノ表ニ三寸鏡靈神藤井宿祢高尚墓、裏ニ「ミソメケリ日数アマ  
タニマチマテケフ朝顔ノ花ノ一花」天保十一年庚子八月十五日  
松齊トアリ。

○文政七年ニ書キシルベノ奥書ニ、

六十二一余ルコトシマデ

トアリ。サレバ天保十一年ニハ七十七歳ナリ。

松ノ屋 賀陽郡宮内（即宮ノ郷<sup>サト</sup>）字三日市ニアリ。今ハ小学校トナレ  
リ。今モ門内ニ大ナル松三本集リ立テリ。

竹ノ庵 文後集上ノ巻ニ、

家ノ西ニサ、ヤカナル庵ツクリス……庵ノ南ノ窓ノ前ニ竹ヲ植エ

茂ラセタリ……カク竹ヲアマタ植エツレバオノヅカラ庵ノ名トモ

ナリヌトゾ。

此ノ庵今ハナシ。

雞頭樹園<sup>カヘアツノ</sup> 同書同卷ニ、

同ジ宮ノ郷ノ内ナガラ松ノ屋トハ離レテ吉野町ト云フ町ノ東、普  
賢院ト云フ寺ノ北隣ニオノガナリドコロヲ作レリ……カヘデノ園  
トゾ云フ。シカ云フ故ハカヘデノ木数ヲ尽シテ植エツレバナリ。

此園ハ今モアレド、カヘデノ木ハ今ハナシ。

父母妻子 向山ナル藤井家ノ墓ノ中ニ、

前但馬守從五位下靜齋藤井宿祢高久墓（表）文化四丁卯年四月六

日卒（左）

是高尚ノ父ニテ、

藤井氏小春靈璽（表）岡越後守為直女。年七十三享和二壬戌年八

月四日卒（右）

是高尚ノ母ナリト岡直廬氏語ラレキ。直廬氏ハ為直ノ曾孫ナリ。妻ノ

墓トオボユルハ、

藤井氏繁弥靈璽（表）文化十五戊寅年正月十三日卒（右）中西十

内重行女（左）

但馬守從五位下大中臣藤井宿祢高豐墓（表）文政八酉年二月十二

日卒（右）

是高尚ノ子ナリ。神ノ御蔭ノ日記（寛政十一年）ニ、

太郎ノ高豐……コトシ九ニナン。

トアレバ文政八年ニハ三十五歳ナリ。又文後集中卷本ノシズクノ条ニ、

ウセニシ高豐ハ……オノレモ妻モイトイカナシウシツ、オホシ

立テタル独子ニナンアリケル。

トアリ。サテ、

藤井松野墓（表）弘化三丙午十月三日已刻卒。但馬守高豐女。下

総守高枝妻。行年二十六（左）

是高尚ノ嫡孫ナリ。又、

宮道護目勝建膽大人靈（表）文久三癸年七月二十五日卒（右）

從五位下守前下総守大中臣藤井宿祢高雅墓（左）

高雅ハ高尚ノ養孫ナリ。神ノ御蔭ノ日記ノ路ニ、

オホデノ君ノ此日記……ソノ事ノ由カク記シオクハ翁ノ家嗣ゲル  
ウマゴニテ松ノ屋ノ木蔭ナル竹ノ垣内（竹庵）ニ住メル藤井高枝  
高枝ハ高雅ノ前名ナリ。此人堀家氏ノ子ナリ。藤井氏ヲ嗣ギオノガ代  
ニ至リテ、藤井ノ氏ヲ改メテ大藤ト云ヒキ。文久三年七月二十五日京  
都ニテ浪士ニ殺サレキ。年四十七。其頃ハ隱居シテ名ヲ幽叟ト云ヘリ  
キ。クハシクハ人云ヒテヨ。

門人 大祓詞後々釈ニ、

オノレニ從ヒテモノ学ブ人近キ年ゴロハ京ヲ始メ国々ニアマタニ  
ナリテ、ソノ中ニハ古キ歌文ノ心詞ヲ釈キアキラメテ、自読ミ書  
ク事モ拙カラヌハコレカレトアレドモ、ムネト神典ヲ読ムニ心ヲ  
留メ力ヲ入ルルハイトイト稀ニテ讃岐国ノ源春野（高松ノ人中村  
春野）ト、此吉備ノ道ノ口ニ業合大枝（備前国邑久郡豊原ノ人）、  
渡辺重豊（岡山ノ人）、当麻尚文（岡山ノ人）、サテハ播磨国源国  
忠（飾磨郡広嶺ノ人芝国忠）五人ナリシニ……

語格ノ学ヲ以テ世ニ聞エタル妙玄寺義門モ高尚ノ弟子ナリ。文後集上  
ノ卷山口ノ栗ノ序ト云フ文ニ、

若狭国小浜ノ里ニテ義門法師トキコユル人……此年頃オノレヲ師  
ノヤウニ思ヒ頼ム人ニナン。

其外京都ニテハ長谷川菅緒、城戸千楯、近藤重弘、湯浅経邦、大橋長  
広等鐙舎ト云フヲ設ケ浪華ニテハ中玉樹、牧野唯宗等小芝ノ屋ト云フ  
ヲ設ケテ高尚ヲ聘シテソノ講説ヲ聴キシコト文後集ニ見エタリ。

附桂花余香ニ見エタル豊ト云フ人ノ事

名古屋人ノ高岡正平云ハク、本書ニ出デタル此作者ノ歌三首ノ中、萬  
紅葉ノ歌ハ渡辺豊ト云フ人ノ家集ニ見エタリ。（但初句「モミヂバノ」  
三句「ハフツタノ」トアルノミタガヘリ。）サレバ此豊ハ桂園入門名簿  
ニ見エタル松永重ニアラスシテ渡辺重豊ナリ。重豊ガ後ニ豊ト云ヒシ  
コトハ今モ残レル其門人等ノ言ニヨリテ明ナリ。サテ重豊ノ事ハ松屋  
文後集上ノ卷雨夜庵ノ詞ト云フ文ニ、

メウ字ハ渡辺左兵衛、名ハ重豊トテ吉備ノ道ノ口ノ岡山ノ里人  
ナン。

伊勢物語新釈第八段ノ註ニ、

渡辺重豊……此重豊ト云フ人ハ道ノ口ノ酒折ノ宮ノ宮人ニテ夙ウ  
ヨリ古書ヲ独ヨク読ミケルヲ、近キ年頃ハ高尚ニ從ヒテ物学ブ人  
ニナン。

重豊ガ景樹ノ門ニ入りシハイツノ事トモ知ラレズ。

（めざまし草三十七卷）

藤井高尚並に其著書（下）

高尚ハ中古ノフリナル文ヲ作ルコトニ長ジタリ。此事ニオキテハ近代  
此人ニ及ブモノナシ。著書ノ板ニ上レルハ、

松ノ落葉四卷、隨筆ナリ。四卷ノ外ニ目錄ト序トヲ載セタル一卷  
アリ。

松屋文集二卷

松屋文後集三卷

三ノシルベ三卷 上卷ハ道ノシルベ、中卷ハ歌ノシルベ、下卷ハ文ノシルベナリ。合セテ三ノシルベト云フ。

オクレシ雁一卷 雁ノユキカヒノ後篇ニテ消息文ノ例ナリ。例ハ皆高尚ノ作（雁ノユキカヒハ真淵ヲ始トシテ名高キ人々ノ消息文ヲ集メタル書也。）

出雲路日記一卷 杵築宮ニ詣デシ道ノ記ナリ。

サキ草一卷 歌ノコトバ書ノカキザマヲ示セル書ナリ。本文ノ始ニ、

歌ノコトバ書ヨサキ草ノ三ノ書キザマアルコトナルヲトアルニヨリテ書ノ名ヲサキ草トハ云フ。

消息文例二卷 中昔ノフリナル消息文ノ書キザマヲサトセル書ナリ。

神ノ御蔭ノ日記二卷 寛政十一年江戸ト京トニモノセシ日記ナリ。江戸ニテハ將軍ニ謁シ、京ニテハ宣下ヲ蒙ルナド「オモダ、シクウレシキ事トリ集メテ皆願フマニマニナシハテヌルハ仕ヘマツル神ノ御蔭ナリ」トテ書ノ名ニオフセシナリ。

日本紀ノ御局ノ考一卷 紫式部ヲ日本紀ノ御局ト云フ所以ヲ考ヘタル書ナリ。

大祓詞後々釈一卷 本居宣長ノ後釈ニ漏シタルヲ補ヒ誤レルヲ正シタリ。

伊勢物語新釈六卷 此物語ノ註釈ハ契仲ノ臆斷、真淵ノ古意ナドアレド、此新釈コソ白眉トハ云フベケレ。

ヒキモノ、サダメ一卷 箏ノコト、琵琶、サミセン、鼓弓、一絃琴ノ優劣ヲ評シタリ。著者ハ箏ノコトヲ好ミテ彈キシ由、本文ニモ序ニモ見エタリ。

浅瀬ノシルベ一卷 灯台モトクラシ、ナマ兵法大キズノモト、ナド云フ俚諺ヲ云ヒ広メテ人ノ教訓トシタリ。

以上以十四部二十九卷

上ニ挙ゲシ書トモノ序跋ノ作者ハ、門人中村寛（松ノ落葉序）、城戸千楯（松屋文集序）、白井惟徳（同書跋）、大橋長広（文後集序）、城戸千楯（同書跋）、門人林秋告（オクレシ雁序）、加藤千蔭、本居大平（共ニサキ草序）、本居宣長（消息文例序）、門人鳥越常成（同書跋）、田中芳樹（即近藤芳樹―御蔭日記序）、養孫藤井高枝（同書跋）、門人石田千頴（日本紀御局考序）、門人竹村尚孝（同書跋）、門人芝国忠（大祓後々釈序）、門人業合大枝（同書跋）、門人渡辺重豊（勢語新釈序）、門人中村春野（同書跋）、門人当麻尚文（ヒキモノ、サダメ序）、門人安藤保世（同書跋）、千家俊信、本居大平（共ニ浅瀬ノシルベ序）、菅晋帥（即茶山―同書跋）ナリ。

別ニ日本紀竟宴和歌集二卷、紫式部日記註釈四卷アリ。彼ニハ松屋高尚大人標註、源（中村）春野大人校訂、此ニハ松屋藤井大人、清水宣昭大人著述トアレドモ、此二書ハ高尚ノ著ニハアラデ、ソノ門人ナル春野ト宣昭ト著ナリ。（竟宴集ハ寧契仲標語、春野補註トアルベシ。）

又著書ノ未版ニナラザルハ枕冊子新釈（文ノシルベニ見エタリ）、幽冥考（道ノシルベニ）、古今集新釈（勢語新釈ニ）、神祇事類条目（文後集ニ）ナドナリ。ソノ外宣長ノ玉ノ小櫛ヲ補ハム意アリシ由文ノシルベニ見エ、勢語新釈ノ拾遺ヲ作ラム志アリシ趣松ノ落葉ニ見エタリ。又或人ノ説ニ稻荷神社考ト云フモノアリトゾ。此等ノ書ハ未得見ズ。

著書脱稿ノ順序

オクレシ雁 消息文例ヨリ前ニ成シ由、奥書ニ見エタリ。

御蔭日記 寛政十一年

消息文例 同年

サキ草 享和三

ヒキモノ、サダメ 文化五年

松屋文集 同八年ノ序アリ

日本紀御局考 同年

浅瀬ノシルベ 同九年

勢語新釈 同十年

三ノシルベ 文政九年

文後集 同十年ノ序アリ

松ノ落葉 同十二年ノ序アリ

出雲路日記 文政十一年

高尚ノ初ノ呼名ハ小膳ト云ヒキ。繁弥ハウツナリ。高尚ノ妻ナリ。此

二事彼里人ノ説ナリ。高尚ノ父高久ハ靈碑ニ享年八十三トアリ。

山陽新報三十二年十一月十四日

岩月白華附有木山なる成親卿の遺蹟

（明治三十二年十一月十二日岡山史談会にて）

井上通泰

白華の墓は備中国賀陽郡庭瀬なる松林寺にあり。碑の表には、

白華堂正叟良直居士

側面には、

天保九戊戌八月十三日岩月澤右衛門長直墓

と刻めり。曾孫斧太郎氏云ふ、

庭瀬藩士なり。年七十三にて没す。

と。げに中山尚菡会の記（天保六年）に有木居士白華七十とあり。

白華が香川景樹の門に入りて歌を学び傍禪を修めしことは、曾て此会

にて述べき。其筆記本年九月十七日の山陽新報に出でたり。

白華同郡有木山なる成親卿の遺蹟を保存せむの志ありて、文政八年

（白華時に年六十）文を作りて人に頒ちき。其文に云はく、

此国吉備津の宮の東の方、谷に沿ひて山路を登れば有木山の別所と云ひて古寺あり。安元の昔新大納言成親卿そこにさすらへ給ひて平氏のつはものに殺され給ひき。其墓六百年を経て石などもうせて僅に其跡残りて苔むしたり。おのれ詣で、山岸の崩れしを見て唐人の古言に陸は谷となるといひしも思ひ出でられぬ。此卿の



いませしをりのこゝろをおもひつゞけて昔の跡を残し石碑を建て

後の世までもなき霊の心を慰めんと云ふ思を起しぬ。吾つたなし

と雖も、月花雪を楽みて世を遁れし身なれば此寺に仮に住居して、

情ある諸人に大和歌から歌を請ひ一卷となして寺にをさめんとす。

石を買ひ文字刻む価をも其人々扶けたまへ。かゝらば郷の霊など

か欣びたまはざるべき。涙をおとしてこひねぐになん。

文政乙酉冬十月 有木別所白華道人

有木別所とは備前国児島郡有木に対して云ふなりとぞ。白華が晩年剃髪して有木別所に住せし事は此の文に見えたる。外号を有木居士といひ、又百人二首（備前人広安雅言編輯、写本二卷）に出でたる白華の歌に、

浮世をばのがれてこゝにあり木山

もの思ふことはなき身なりけり

とあるにて明なり。又白華が当時成親卿の事跡をしらぶるに汲々たりしは文政十年上京の日記に、

六月四日法師（玄如）同道誓願寺中穂井田うし忠友子に行きて、

成親卿御家の事委細相尋ね候て七つ比迄談話す。

などあるにて知らる。忠友は景樹門下第一の博識家なり。

因に云ふ。九月十七日の山陽新報に出だした拙稿の中に、小原某を倉敷の人井上端木かと云へるは誤なり。端木の墓は備中国倉敷観音寺の門前なる水月庵にあり。碑の表には慶雲処士端木、側面には天保三年壬辰九月二十有七日没とあり。されば天保十年には端木既に世にあら

ず。

今有木山に存する有木山青蓮寺の碑並に成親卿の霊碑は白華の作りしものにはあらじか。よく知れらむ古老教へたまへ。

（みお くみえ／本学大学院特別研究員）